

和歌山県立図書館

「濱口梧陵文庫の世界」展

和歌山県立図書館に所蔵されている濱口梧陵翁が生涯かけて読み続けたといわれている「濱口梧陵文庫」の一部が展示されています。「梧陵文庫」は約550点、5,705冊もの多数ですが、今回はその一部が展示されています。「海国図志」「万寿盛典」「西清古艦」「地球説略」の4種類です。これらは全部中国の書籍群です。展示会では、絵図は大きく拡大して見やすいようにして展示されていますが、それでも細かい絵がきっちり描かれています。中国大陸で著された書籍は一般的に漢籍と呼ばれ、版木で印刷されたものが多いといえます。ここで展示されたものは、たいへん細かい絵が描かれていますのでその版を彫る技術はたいへんなものだったと推察します。もちろん日本で創られた書籍も版木を彫って印刷したものですから、職人技です。

当時、日本で一番多くの蔵書家は加賀前田家で49,000冊、多くの蔵書を抱えていたのは、ほとんどが大家であったようです。梧陵翁のように民間人の蔵書家というのはたいへん珍しかったようです。梧陵文庫は、蔵書群10傑の7番目ということですからたいへんなものです。耐久社等の紀州での教育活動に大きな役割を果たしたことでしょう。

4月10日
広川町日本遺産ガイドの会のメンバーが



県立図書館へ出向き、研究されている図書館の松本氏からご説明をいただきました。細かい印刷と、発行元の中国を含めても、非常に貴重な書籍であるということでした。欄外への梧陵さん直筆の書き込みもあって、寸暇を惜しんで読み込んだことが伺い知れました。

この4種の書籍は、県立図書館デジタルアーカイブで公開されています。



県立図書館
デジタルアーカイブ

「稲むらの火講座」

客員研究員講演会のご案内

昨年4月1日、拓殖大学地方政治行政研究所特任教授・防災教育研究センター長の濱口和久氏に稲むらの火の館客員研究員を委嘱いたしました。濱口先生は、その他にも広川町の小学生が数年前から受検している「ジュニア防災検定」を実施している(一財)防災教育推進協会常務理事・事務局長も含め、多数の団体の役職も兼務されています。



また、全国各地で講演をされていますし、各種雑誌や書籍、新聞へ寄稿されています。

第15回稲むらの火講座でもご講演をいただきましたが、客員研究員にご就任いただきましたので、この機会に再度ご講演をお願いしました。

日時 令和6年6月15日 13時半～15時
場所 稲むらの火の館3階ガイダンスルーム
演題 『国難災害と濱口梧陵の業績の意義』

濱口先生のご紹介をさせていただきます。

防衛大学校材料物性工学科卒、日本大学大学院総合社会情報研究科博士前期課程修了、名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程単位取得満期退学。防衛庁陸上自衛隊、元首相秘書、栃木県首席政策監(防災・危機管理担当兼務)を歴任。

冒頭の役職の外、東日本国際大学健康社会戦略研究所客員教授、日本大学法学部公共政策学科非常勤講師(消防政策)、日本航空学園理事長室アドバイザー兼特別講師等多数の役職を兼務。

産経新聞の正論コーナーの執筆メンバーにも選ばれ、雑誌や書籍にも寄稿されています。

6月15日は梧陵さんの誕生日で、稲むらの火の館は無料開館です。講演会前後に館内は自由に見学していただけます。受講希望者は電話でのお申込み(0737-64-1760)をお願いします。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第38回 特殊性・普遍性・偶有性

「災害には個性があって、ひとつとして同じタイプのものはない」という箴言がある。ハザードの種類や規模、季節・天候、発生時刻・場所など、災害の構成要素は無限にあって常に異なるため、原理的に同一事象には成り得ない。だから、メディアは「災害の顔」を描こうと躍起になる。

しかし、「特殊性」を強調すればするほど、世間は事態の「異質性」を実感することになる。要は、自分の暮らしとは異質の出来事なのだから、自分とは関係が薄い「対岸の火事」だったと“安心”(se-cura)してしまうのだ。ただし、この心性をひとたび許してしまうと、被災地の外では、「だれの身にも起き得る」という事態の「普遍性」を導き出す機制が挫かれてしまう。本来であれば自分たちの身に引き寄せて、「わがこと」(教訓)にしなければならぬはずなのに。

こうした閉塞を克服するために、ここで単に事態の「類似性・共通性」を強調するだけでは不十分である。同じような人口規模か、同程度の高齢化率か、産業構造は相同か、アクセス路の地盤条件は同じか等々、要素の「類似性・共通性」に目を奪われてしまうと、事態の「普遍性」は切り詰められてしまうからだ。

ならばどうすればよいのか。われわれが災害の「特殊性」から「普遍性」を手にするために通るべき回路は、事態の「偶有性」(contingens)に注視することにこそある。“他でもあり得たはずだった”という想像の翼のことである。

能登半島地震を例にとれば、それは別の季節でも起き得たし、闇夜の不意打ちだったかもしれないし、もっと強い揺れが巨大な構造物を打ち壊していたかもしれないし、全く別の場所——たとえば都会——でも起き得たはずだと思いをめぐらせることである。「偶有性」の視座があれば、社会は多くの教訓を得ることができるだろう。

【館長日記】

○ 耐久高校硬式野球部が初めて選抜大会で甲子園へ出場しました。野球部として長い伝統を持ちながらも、初めての甲子園ということで、選手や学校はもちろんですが、卒業生や地元の皆さんも大騒ぎでしたね。昨年の秋の近畿大会でベスト4に進出した時から、選抜に選ばれるのがほぼ確実ということで、盛り上がっていました。その時のスポーツ新聞も、そして1月26日の正式決定の時のニュースも号外まで出たくらいでした。

「耐久」というユニークな校名についても、マスコミに、江戸時代、黒船来航の前年に創立された「耐久社」が始まりという取上げられ方でした。私も、「館」へのお客様にガイダンスでお話をしました。耐久が選抜に選ばれたのは知っていたが、変わった校名が不思議でしたが、これでよく分かりました、という人が結構おられました。

大勢の応援団も注目され、応援団の最優秀賞だったそうですね。開会式をきっちり1時間見たのは初めてでしたが、応援団の表彰があるのを知らなかったの、閉会式を見ていなかったのは残念でした。教育活動が、町おこしになりましたね。

○ 耐久ブームの中、原点の「耐久社」を今一度振り返ろうと、「耐久社講座」を開催いたしました。資料は作りましたが、これも急なことでしたので、参加者の皆様に資料代を負担していただきました。「耐久社」での開催でしたので、場所が狭いので、広く参加を呼び掛けることはできませんでした。講師の先生をお招きしてということではなく、進行係が進めていく方式でした。初めての試みでしたが、昔の書籍や冊子に載っていた写真も、パワーポイントで活用して進めました。参加者の皆さんの思い出話も結構出してくれましたので、楽しい講座になりました。講師の先生のいない講座という方法も、参加者ひとり一人が発言できて、他の参加者に聞きながらということでも、おもしろい方法でした。この時出た質問に「耐久中学校はいつを起源にしているか」ということがありましたが、学校の沿革史には昭和22年5月2日に開校式を挙行とあるそうです。耐久中学校の起源は昭和ということになっているのです。

このような講座、またやってみたいです。